

## C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ⑬

## \*天使か悪魔か、青く美しきナポリ\*

緋月 まや

「ナポリを見て死ね(Vedi Napoli e poi muori)」。  
この言葉は、ドイツの文豪ゲーテが憧れの国イ  
タリアを二年の歳月をかけて見聞した旅行記『イタ  
リア紀行』の中で書きとめたものだ。命ある間にナ  
ポリ湾が織り成す風光明媚を見なくては、生まれ  
てきた甲斐がないという意味である。サンタ・ルチ  
アの波止場を歩いていると、ナポリ湾の青の清々  
しさに心が躍る。魚になって跳ね回ってみたいよ  
うな、鳥になって飛んでみたいような、そんな解放  
感がこみあげてくる。伝説によると、天国を追放さ  
れる時、墮天使ルシファーはその樂園の一部を  
持ち去ろうとしてナポリ湾に落としてしまった。ナ  
ポリ湾がこの世のものとは思われぬほど青く美し

いのはそのため  
なのだ——。

海辺にたたく  
むレストランの  
テラス席で、ラク  
リマ・クリスティ  
の白を注文した。  
水平線の向こう  
には、ヴェスヴィ  
オ山がなだら  
かな稜線を描い  
ている。ラクリ  
マ・クリスティは  
この山のふもと  
で造られるワイ



ンで、「キリストの涙」の意だ。墮天使の所業を悲  
しみ、キリストはヴェスヴィオの地に涙を零した。  
そこから葡萄の木が育ち、このワインが造られる  
ようになったというのが名前の由来である。ワイ  
ン好きのゲーテはラクリマ・クリスティを味わい、  
「キリストはなぜドイツに涙を零してくれなかつた  
のだらう」と称賛したという。実際、イタリアの白ワ  
インには、その地ならではの土壌の滋味が浸み  
込んでいるかのような旨味がある。グラスの中、  
キリストの涙は麦わら色に輝いて、柑橘類の清涼  
感と磯の香りを漂わせていた。

メトロで二駅も行けば、すっかり下町だ。ピッツ  
ェリアだらけの細い路地を歩いていると、突然、太  
陽が雲間から顔を出して視界がぱっと華やいだ。  
青空を背に、飾り気のない真っ白なTシャツが陽  
光を浴びて透けている。このまちでは路地の両側  
に並ぶ店舗の二階から上は住宅になっていて、  
向かい合った窓の鉄さくりにロープを渡して洗濯物  
を干す。ナポリ名物の風景が、実に絵になっていた。  
北国ドイツの人たちは、このきらめく太陽の光  
を求めてイタリアにやってくるのかもしれない。

ゲーテの旅は 1786 年、三十七歳の秋に始まっ  
た。フランクフルトの裕福な家庭に生まれたゲー  
テは、名門大学で法学を学ぶよう父親に強られる。  
しかし、父親の目を盗むようにしては文学活  
動に勤しみ、主人公の青年が婚約者のいる女性  
に恋をした苦悩から自殺する『若きウェルテルの  
悩み』を二十五歳で出版する。道徳と抑えられな  
い思慕の情の間で葛藤する青年期の心を描いた

この作品は、ヨーロッパ中の若者の熱狂的な支持を得た。ナポレオンの愛読書としても有名だ。この成功を機にゲーテは翌年、十八歳の文学青年だったザクセン＝ヴァイマル公国の君主から首都ヴァイマルに招かれる。当時のドイツは神聖ローマ帝国の弱体化に伴い、大貴族を君主とする小国家が乱立していた。ヴァイマル公国もそのひとつだ。君主から兄の

ように慕われ、文化人であった七歳年上のシュタイン男爵夫人との恋愛も始まって逗留が長引くうちに、ゲーテは官僚としての能力を発揮するようになった。やがては内閣の首班となり、行政のトップに上り詰める。こうして十年が過ぎた時、煩雑な政務に忙殺されて文学活動はすっかり停滞していた。ゲーテは創作者としての魂を取り戻すため、文学的インスピレーションを求めて、かねてから夢見ていたイタリアへの旅を決意したのである。

『イタリア紀行』によると、逃げ出すようにドイツを後にしたゲーテは峠を越え、オーストリアからイタリアに入った。トレントを南下してロヴェレートまで来ると、ついに馬車の御者も宿の亭主もドイツ語を話さなくなった。その時の心境を「今からはイタリア語の話術が試される。好きな言語が日常の言語となるのかと思うと実に愉快だ」と綴っている。言葉を通じて自分をイタリアに浸透させていくことへの高揚感が伝わってくる一節だ。ゲーテは少年時代から英仏伊語、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語までを操る語学の天才であった。ヴェネツィア、ポローニャを見物した後、フィレンツェを滞在三時間で通り過ぎると、「世界の首都」と仰いでいたローマに腰を据える。バチカン宮殿、サン・ピエトロ大聖堂はもちろん、幾多の教会を巡っては絵画、美術品を鑑賞して古代芸術の研究に没頭した。



【カプリ島から臨むナポリ湾(上) 青の洞窟(下)】

翌朝は晴天に恵まれ、ナポリ湾に浮かぶ断崖絶壁の小島、カプリ島を訪れることにした。ナポリからは南に三十キロほどだ。小舟に乗って、「青の洞窟」に入った。海水が崖を侵食してできた洞窟の入り口は小さい。身をかがめるようにして潜り抜けると、そこには一面、壮絶なまでに神秘的な青の輝きが広がっていた。小さな入り口であるのに、そこから射し込んでくる太陽の光はとてつもなく強い。その陽光に海底の白い石灰岩が反射することで、無色のはずの透き通った水面がこんなにも幻想的な青を生み出すのだ。神秘の青を創り出しているのは太陽の光なのである。ナポリの下町で見た白い T シャツが脳裏に浮かんだ。太陽の光という魔法は万物を変質させ、その姿を感動的なほど美しく見せるのだ。青の洞窟を出て



崖の上の高台まで登ると、眼下に広がるナポリ湾の絶景に息をのんだ。曇り空の下で見た前日の海とはまったく表情が違った。浅瀬には鮮やかなセルリアンブルー、その奥には果てしなく続く紺碧の青がきらめいている。伝説は誇張なんかではなかった。駭かない太陽の光を受けて輝く時、ナポリ湾は遥か上空から零れ落ちてきた天国みたいに美しい。

「光が濃ければ影も濃い」とは、ゲーテの格言だ。ならば、この美しい楽園のどこに影があるのだろう。高台に築かれたまちには、赤、ピンク、黄色と、カラフルな建物が並んでいた。陽気な色彩の中、ふと再びナポリ湾の方を振り返った時、水平線の向こうに浮かぶヴェスヴィオの薄暗い山影がなんだか不吉に見えた。紀元前から何度も噴火を繰り返してきた山だ。二千年前の大噴火では、その火砕流が、二万人もが暮らしていたポンペイのまちを一瞬にして地中に埋めた。最後の噴火から八十年が経つが、この山に封印された狂暴性こそが影なのかもしれない。ゲーテがローマで芸術研究に励んでいる間にも噴火があった。文学者であると同時に、自然科学者でもあったゲーテは地質学にも造詣が深かった。噴火のニュースを聞きつけるとナポリに移動し、ナポリ湾を愛でる日々の合間にヴェスヴィオ登山を繰り返した。噴火口から溶岩が流れ出していくさまを見つめ、そのおどろおどろしく赤い口を、人々を恐怖に陥れる地獄と呼んだ。ナポリは、ゲーテにとって、天国と地獄という対極にある強烈な光と影が隣り合わせに存在する場所だったのである。

この光と影というモチーフは、ゲーテが六十年もの歳月をかけて完成させた戯曲『ファウスト』に帰結する。1788年春、ゲーテはイタリアで得た知識を携えて祖国に戻ると、ドイツ文学の黄金時代を築いていった。その代表作が『ファウスト』だ。神の救済という光と、悪魔の誘惑という影のはざま、あらゆる欲望を叶えるために悪魔に魂を売った男の物語である。学問の探求に身を捧げるうち、

いつの間にか年老いてしまったファウスト博士は悪魔の力で人生をやり直す。薬を飲んで若返り、美しい娘と恋に落ち、身ごもらせ、姿を消す。うろたえた娘は我が子を殺し、死刑を宣告される。この悲劇の後もファウストは享楽を追い求め、やがては国家を支配し、権力欲を満たしていく。すべての欲望を叶えたファウストが息絶えた瞬間、悪魔がその魂を奪おうとする。それを妨げたのは、ファウストが身を破滅させたはずの娘の真の愛だった。救われたファウストの魂は、静かに神の国に導かれていく。八十二歳で永眠する直前まで、ゲーテはこの壮大な光と影の物語の推敲を重ねていたという。その一部はイタリア旅行中にも執筆され、ドイツ帰国後まもなく『ファウスト断片』というタイトルで発表されている。ナポリが見せた隣り合わせの天国と地獄は、芸術家ゲーテのインスピレーションをどれほどか刺激したことだろう。イタリア旅行を経て、ゲーテは見事、文学者としての再生を果たしたのである。

\*

科学者としてのゲーテは、色の見え方についても研究を重ね、色彩心理学の祖となった。著書『色彩論』では、色の生成に不可欠な要素は光と闇であり、どちらを欠いても色彩は成立しないと説いている。その上で、青については生命の源泉や霊性を漂わせる色と位置づけた。つまり、恐れを抱かせることもあれば、安らぎを与えることもある。海を見て、心癒されることもあれば、たまらない悲しみがこみあげてくることもあるのはこのためだろうか。青そのものが、光と影という相反する二つの性格を含有しているのだ。青が持つこの両義性、その神秘性もまた、真実の美を探し求めるゲーテの心のひだに触れたとすれば、『ファウスト』はナポリというまちがその完成度に磨きをかけた傑作なのである。

(ライター、イタリアソムリエ協会/  
AIS 認定ソムリエ)

## イタリアげんぱつ紀行 その5

### \* オープン・ゲートを逃す \*

二宮 大輔

前回の「イタリアげんぱつ紀行その4」の末尾で、外から眺めるだけでなく、イタリアの原発敷地内を見学してみたいが、まだアポが取れていないので、本当に見学が実現するかわからないと書いた。結論から言うと、まだ原発内には入れていない。だが、原発の研究施設には入ることができた。だが、そのときの話は、まだ事情があって世に発表できないので、今回はこれまでイタリアの原発について調べたことを改めてまとめてみたい。私が見学した研究施設を知るうえでも大事な基本情報なので、どうかお付き合い願いたい。専門的な用語が山ほどあるのだが、私もまた門外漢なので、素人であることを逆手にとって自分が理解できたことをできるだけ平易な言葉で書いてみようと思う。

イタリアの原発の前に、まず一般的な原子力発電所について。

原子力発電というのは、鉱石や海水など自然界に存在するウランなどを核燃料として抽出し、核分裂させて熱エネルギーをつくり出し、そのエネルギーで水を沸騰させて蒸気をつくり、さらにその蒸気で発電機のタービンを回して電気をつくる仕組みだ。

タービンを回すという部分は火力発電や水力発電でも同じことで、要はいかにしてタービンを回すエネルギーをつくり出すかの問題になってくる。これが火力発電だと、エネルギーをつくるために石油や石炭などの化石燃料を燃やすので、その際に多くの二酸化炭素が発生し、地球温暖化と大気汚染の主な原因になる。

それに引き換え、原子力は大気を汚さないという意味でクリーンな発電ではあるが、周知の通り、そのデメリットも大きい。まず、実際に核燃料を核分裂させる装置を原子炉と呼ぶのだが、原子炉

内の核分裂によって生まれた物質は分裂が終わった後もしばらく熱を発するため、継続的に冷却する必要がある。何かの事故でこの冷却システムが停止してしまうと、原子炉内の制御棒や核燃料が溶けてしまう。これがいわゆるメルトダウンというやつだ。メルトダウンが進むと核燃料が原子炉の外に漏れだし、人体に深刻な影響を及ぼす放射能が周囲に飛び散ってしまう。そのため冷却システムが停止しないように厳重な安全対策が必須となる。また、事故が起こらなくとも、原子力発電における一連の作業で核燃料廃棄物は生成され続ける。これら廃棄物をいかに処理するかという問題も、現状ではクリアできていない。

ずいぶんと物々しいが、より安全で、それでいてコストパフォーマンスの良い原子炉の開発に向けて、日々研究がなされており、どんどん原子炉のバージョンが更新されている。それゆえに一口に原子炉と言っても、実は多種多様な種類が存在する。そして、現在研究中の原子炉を「次世代原子炉」と位置づけ、それをもとにして歴史を振り返り、世代ごとの分類もなされている。そこで原子炉の種類と世代を紹介しよう。

第一世代の原子炉は 1950 年代から 1960 年代につくられたもので、発電量は比較的少なく、商用になる前のいわばプロトタイプだ。種類としては、熱エネルギーを蒸気として抽出する沸騰水型原子炉、熱エネルギーで熱した加圧水を蒸気発生器に通し高圧高温の蒸気を得る加圧水型原子炉、熱エネルギーを蒸気にするのではなく高温炭酸ガスとして抽出するマグノックス炉があった。

第二世代は 1960 年代から 1990 年代につくられた原子炉で、基本的に第一世代の原子炉を本格的に商用として使い始めたものだ。スリーマイル、チェルノブイリ、福島で使われていたのも第二世代の原子炉ということになる。それに改良を加えたのが 1990 年以降につくられた第三世代の原子炉で、その多くに、メルトダウンが防げるようにと緊急炉心冷却システムが設置されている。

ちなみにイタリアにあった4つの原発で使用されていた原子炉は、ラティーナ原発がマグノックス炉、ガリリアーノ原発、カオルソ原発が沸騰水型原子炉、トリノ原発が加圧水型原子炉で、いずれも第一世代・第二世代に属していた。

さて、ここからがややこしい。現在、全世界で研究開発が進められているのが、先述の次世代原子炉、つまり第四世代の原子炉だ。第四世代では、これまでとは大きく異なるアプローチで革新的な原子炉の研究がなされている。数あるなかでも特にイタリアで研究が進められているのが鉛冷却高速炉だ。核分裂の連鎖反応で自ら核燃料を増殖させる高速炉で、使用するウランの量を格段に減らすことができる。さらに、核分裂で発生した熱を冷却するのに、水の代わりに液体の鉛を利用するため、熱伝導性が高く、ゆえに熱を冷ますのが早い。つまり、事故が起こったときの危険性も大幅に下がるというわけだ。イタリア大手紙コッリエーレ・デッラ・セーラの質問に答えた原子力エネルギー研究機関 ENEA の責任者アレッシェンドロ・ドーダロによると、実際にこの原子炉が開発されるまであと20年から25年かかるという。

そこまでは待ってられない。というわけで期待されているのが小型モジュール炉だ。平たく言うと現行の第三世代と、これから主流になるであろう第四世代の中間に位置する原子炉で、現行の原子炉の改良版、または第四世代の原子炉を小型化することでコストを抑え、建設しやすくしたもので、こちらはあと10年以内に実用化が可能だという。だが、小型であるがゆえに発電量が少なく、いくつもの原子炉を連結させて使用することが想定されている。これが核兵器にも関連する技術と情報を不用意に拡散させてしまうのではないかという懸念にもつながる。

以前にも書いたが、1986年のチェルノブイリ原発事故で原発の危険性を指摘する声が高まり、1987年の国民投票で、将来的な原発の運用および建設の中止が決定しており、1990年にはイタリアで稼働中の原発がゼロになり、現在は4つの原発とともに廃炉作業が進められている。

廃炉作業を任されているのが、民営化された電力会社 ENEL のグループ会社として1999年に設立された SOGIN (Società Gestione Impianti Nucleari) だ。2000年に国営化され、4つの原発だけでなく、原発関連施設の解体も担当している。手書きで恐縮だが、掲載したイタリア地図で確認していただきたいのは、ピエモンテ州アレッシェンド

リアのボスコ・マレンゴ核濃縮工場、ラツィオ州カザッチャ核燃料サイクル研究施設、「イタリアげんぱつ紀行その1」で紹介したウルデリコ・ペッシェが告発したバジリカータ州ロトンデッラの核燃料再処理工場、サルツジャ濃縮ウラン抽出工場、ロンバルディア州イスプラの ISPR-1 実験炉。この5つの関連施設にも原子炉があり、いずれも SOGIN が解体を担当している。



(●主要都市 ○原発 ☆関連施設)

すでに1990年代にはすべての原子炉を停止しておきながら、廃炉に多大な時間を要している。その一因は廃棄物の最終処理地を決めかねているからなのだが、それにしても時間がかかりすぎている。それを取り繕うように、SOGIN では年に一回、廃炉の状況を公開するために、広く報道関係者を受け入れ、4つの原発内部を見学できるオープン・ゲートというイベントを開催している。2024年は5月11日、5月12日に開催されており、それを知ったのが、5月14日の日本発イタリア行の飛行機の予約をした後だった。なんという痛恨のミス。先に SOGIN のサイトを調べていれば気づいていたはずなのに、行き当たりばったりで5月

14 日のチケットを取ってしまい、今からではいろいろな兼ね合いで変更はきかない。

そこで私が狙いを定めたのが ENEA の研究センターだった。ENEA というのはイタリア政府が支援するエネルギー研究機関だ。1982 年の設立当初は「原子力エネルギーと代替エネルギー」(Energia Nucleare ed Energie Alternative)の頭文字をとって ENEA という名称の原子力エネルギー研究機関だったが、1987 年の国民投票後、研究目的も含め見直しがなされ、頭文字はそのままに「新技術・エネルギー・環境のための機関」(Ente per le nuove tecnologie, l'energia e l'ambiente)となり、持続的開発のための研究が課された。現在はさらにその名称が変わり「新技術・エネルギー・持続的経済開発機構」(Agenzia nazionale per le nuove tecnologie, l'energia e lo sviluppo economico sostenibile)となっているが ENEA と呼ばれ続けている。現在 SOGIN が管理している 5 つの関連施設は、もともと ENEA が所有しており、今でもカザツチャ、イスプラ、サルツジャ、ロトンデッラの 4 つの施設に ENEA の研究施設が残されている。そこでは持続的なエネルギーとして次世代原子炉の研究も続けられており、廃炉を進める SOGIN と原子炉研究を進める ENEA という、不思議な構図が見られる。

なぜなら、イタリアは完全に反原発に振り切ったわけではないからだ。2024 年現在も徐々に原発再開の流れができてはじめてある。ヨーロッパ全体の深刻な気候変動を食い止めるために火力発電による二酸化炭素の排出を抑えることが喫緊の課題となっており、加えてロシアによるウクライナ侵攻以降、天然ガスの価格高騰も原発再開の追い風になった。現イタリア内閣も、まだ具体的には何も決まっていないが、先述の小型モジュール炉の建設を検討しているし、今年の 4 月に開催された科学シンポジウムでは、首相のジョルジャ・メローニは第四世代原発のさらにその先の研究である核融合炉にも前向きな姿勢を示している。

というわけで、2024 年 5 月、原発には入れなかったものの、ある知人に ENEA と連絡を取ってもらい、ありがたいことに、小型モジュール炉と核融合炉の研究が重点的に行われている ENEA の

施設を訪問することができた。次回はその様子を報告したい。

(翻訳家、元当館語学受講生)

## <ジェラートから見えるイタリア>

～ピスタチオのトロフィーがイタリアを飛び出した～

嵐山・新八茶屋の中川マリ子様をお招きし、ジェラートにまつわるお話を伺います。中川様はイタリア国際ジェラート大会で日本人ジェラテリアとして初めて入賞。以降も現地で数々の賞を受けられた実力の持ち主です。今回のご講演では試食会もごまいます。

- ・日 時： 2024 年 8 月 24 日(土)  
午前部 10:30～12:30  
午後部 14:00～16:00  
※いずれも同じ内容です。
- ・場 所： 日本イタリア会館 京都本校(対面のみ)
- ・定 員： 各回 20 名(先着順)
- ・お申込み： 当館ホームページ、お電話
- ・料 金： 2,000 円(一般、現受講生)  
1,000 円(当館会員)



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)  
URL: <http://italiakaikan.jp/>